

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 25 年 10 月 31 日発行 第 28 号

オーシャンドリーム歓迎ウェルカムフェスタ

2013 年 10 月 9 日に世界中を旅行するお客様を乗せた客船オーシャンドリーム号が石巻港中島埠頭に寄港し、これを祝う歓迎イベントが行われました。開催当日は強風の中でしたが、無事に開催され、石巻市や東松島市、女川町、松島町の観光協会や伊達武将隊と私達石巻専修大学の学生が客船の寄港を歓迎しました。

石巻専修大学の庄子ゼミは、来場したお客様に石巻の B 級グルメ「石巻焼きそば」を提供し、調理体験の時間を設けました。伊達武将隊の伊達政宗と支倉常長を演じる役者さんが陽気に石巻焼きそばの作り方を自ら実演し、来場者を楽しませていました。

私たち丸岡ゼミのテントでは「工房かざみどり」協力のもとシュガーデコレーション、シャドーボックスの体験コーナーとサン・ファン・パウティスタ号の板返しのオブジェを設置し、写真の無料撮影と印刷のコーナーを設けました。シュガーデコレーションは砂糖菓子を粘土のように造形していくアートです。初心者の方でも簡単に作れるよう支倉常長をモチーフにした小さなお手本が用意されました。20 分ほど作る楽しみに熱中したり、意外に若い女性の方が体験するなど、盛況でした。

今年は慶長遣欧使節出帆 400 年記念ということもあり、板返しのオブジェや支倉常長の肖像画に興味をもたれる方もいました。

客船のお客様に話を伺ったところ、スペインや地中海を旅してきたそうで、そのお客様は「いまでこそ豪華客船は GPS などがあるから安全かつ快適に世界中をまわれるが、昔の支倉常長一向は羅針盤のみを頼りに危険にさらされながらもスペインのコリア・デル・リオに行ったことがすごいよね」とおっしゃり、そこにロマンを感じている様子でした。

出航の時は力強い女川潮騒太鼓の音色に包まれ多くの石巻の来場者に見送られて旅立っていきました。

今回の歓迎イベントでは体験を主にした観光 PR を行いました。私達にできることは、知識を提供すること以上に、お客様に体験を通して楽しんでいただくというおもてなしや観光アピールだと思います。

(小久保敬太)



シュガーデコレーション



多彩なクルーズ船内企画

石巻港に寄港したオーシャンドリーム号はこれまでのクルーズ船とは異なる特徴を備えていました。

まず、この船はアジア、アメリカ、ヨーロッパにまたがる約 20 の国々を回ってくるという、文字通り世界周航に近い船でした。航路とともに、サイズ(全長 205m)も客数(約 700)も、スケールが大きな船でした。

そして、お客さんは元気のいい方が目立ちました。

入港セレモニー後まもなく、テントで無料の写真提供サービスをしていると、おばさん 3 人組が現れました。関西弁で「[撮った]写真いつもらえるの?」と聞かれました。プリンタの調子が悪く、最初、私は「お待ちいただければ…少し…」とあいまいに答えていましたが、次の予定時間が迫り急ぐ様子だったため、「5 分くらい」と慌てて付け足しました。すると「最初っからそう言わんといかんわ」とピシリ。押されっぱなしでした。

あとで、他のお客さんから「船の中で目立つのは関西の人」と教わり、押されているのは私だけではないと知ってほっとし、これも文化の違いと納得しました。

港の岸壁で歓迎していた私たちにすぐわかったことは、他の船に比べ乗船客の年齢層がずっと若いことです。直接乗船客に尋ねると、寮のように 4 人一部屋で安く旅行する方法も用意されているとのことで、あまりお金をもっていない若い人も利用しやすくなっています。

船の中での過ごし方も他の豪華客船とはだいぶ違うようです。小グループに分かれて乗船客が自分の得意なことを他の乗船客に教える小教室を多数開催するのだそうです。このような小さな企画が旅行中の船内にあふれていて、乗船客が退屈しないどころか、80 日余りの旅を終えると「もう着いたのか」という感覚になるといいます。このような環境ならば、お客さん同士が友達になることも容易だと思います。多彩な企画が長い船旅を豊かにしているようです。

船の中では様々な講習会も用意されているそうです。この船の中で乗船客は国際政治や支倉常長の講義を受け勉強してきたそうです。もっとも、「勉強は勘弁してくれ」という乗船客は、マージャンやその他の娯楽を楽しむ自由もあるようです。

「国際政治の話をすると、どうしても気まづくなることがあるのでは?」と私が質問すると、船側は、「かつてパレスチナ人とイスラエル人が同乗したことがありましたが、気まづさも勉強の一部と考えています」というお答えでした。通常の接客業ではタブーとされる政治の話題も、この船では勉強材料のようです。

この船の乗船客はきっと、豊かな企画を好む旺盛な好奇心の持ち主なのだと思います。冒険心にも富んでいるに違いありません。このような乗船客と船の力で、石巻の港がだいぶ活気付いたと感じました。

(丸岡泰)

石巻専修大卒業生がプロ野球楽天に

先月 24 日、東京都内のホテルでプロ野球ドラフト会議が行われ、日本製紙石巻から相沢晋投手（26）が東北楽天ゴールデンイーグルスからドラフト 8 位指名を受けました。相沢晋投手はチームの主力投手として活躍してきました。日本製紙石巻からドラフトで指名されるのは、ヤクルトの久古健太郎投手、比屋根渉外野手、太田裕哉投手に続いて 4 人目です。

石巻専修大学からは数年前、卒業後すぐこれもヤクルトの捕手として入団した例がありましたが、それ以来の快挙です。少なくない大学で、野球エリートを養成するため授業への出席を求めていると聞きますが、石巻専修大学では野球部の学生も他の学生と同じように授業に出て単位を取る仕組みです。ですから、野球以外の視野の広い人材が輩出されていると言えると思います。

相沢投手は新潟市出身で新潟県巻高校、石巻専修大学を卒業後日本製紙石巻に入社しました。身長 172 センチ、体重 72 キロの体から最速 146 キロの速球とキレのある変化球を武器に活躍してきました。石巻専修大学 4 年生の春の南東北大学リーグ戦では全試合に先発し、同大学のリーグ優勝にも大きく貢献しました。

日本製紙石巻に入社後も、今年の都市対抗野球 2 次予選東北大会決勝では無四球完封をするなど、最優秀選手に選ばれました。また東京ドームでの都市対抗野球では 2 回戦の試合に先発し 6 回を無失点で抑え、チームの 8 強入り、また今年からは投手コーチも兼任し、チームの大黒柱として貢献してきました。

楽天からのドラフト指名はこのような実績の結果です。今年パリーグを制し日本シリーズへの出場を決め、現在シリーズを闘っている楽天は東日本大震災で大きな被害を受けた石巻にとってもっとも身近なプロ野球チームであり、その意味で嬉しく思います。

報道によると、相沢晋投手をスカウトした上岡スカウトは、石巻の選手だから取ったのではなく彼の実力を見て星野監督に推薦したと話しています。「左右のコースに変化球が投げられるところが魅力。フィールディングがうまく、牽制の速さなどを評価した。また真摯な態度や若手の手本になるなど人間的にも素晴らしい」と指名理由を説明しています。

大学の野球部の後輩としては、相沢さんが投手としての実力だけでなく、人間的にもスカウトから評価されていることを嬉しく思います。

相沢晋投手は「指名を受けてほっとした。石巻は大学時代から住んでいる第二の故郷。ここでプロになれてよかった。早く 1 軍で投げられるようになって東北を盛り上げていきたい」と話したそうです。この言葉から、石巻と東北への特別な思いが伝わります。

石巻から相沢投手のようなプロ野球選手が出ることによって石巻に住んでいる人も元気が出ると思うので、石巻の復興のためにも楽天の中心選手になって活躍してほしいです。また、相沢投手が投げている姿を見せ石巻を盛り上げ、元気のある石巻市にしたいと私は思います。

（涌井翔太）

「震災文庫」を読んでみよう

東日本大震災発生後、関連する書籍が多く発行されました。これらの書籍はテレビやインターネットでは伝えきれない情報を多く提供しています。ここでは丸岡ゼミナール生徒がぜひ皆さんに読んでもらいたい「震災文庫」を紹介します。

< 1 >

北村淳編著『写真で見るトモダチ作戦』並木書房（1800 円+税）

< 概要 >

「トモダチ作戦」とは 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に際して、自衛隊とアメリカ軍の過去に例のない大規模な共同救援活動の作戦名です。この書籍は震災以前の米海軍や米海兵隊の様子から震災直後の様子、そして 4 月 1 日以降のトモダチ作戦終了までを写真とともに記載したものとなっています。

< 感想 >

日本の自衛隊とアメリカ軍が手を取り合って災害に立ち向かった姿を明瞭に記載した書籍です。私はここまでわかりやすく記載している書籍を見たことがありませんでした。震災当時の様子や自衛隊とアメリカ軍の行動を写した写真が 400 点以上あり、小学生でもわかりやすいものとなっています。また、軍事的教訓や著者の考察などが記載しているため大人でも納得し、学べる書籍となっています。

（久道溪）

< 2 >

日本教育方法学会編『東日本大震災からの復興と教育方針 防災教育と原発問題』図書文化社（2000 円+税）

< 概要 >

この本は、第一部は東日本大震災と教育方法学の課題、第二部は防災・復興に取り組む教育方法、第三部は原発問題と教育方法、そして第四部は教育方法学の研究動向という四部で構成されています。

まず第一部では、被災した岩手・宮城・福島の三県で実際に行われた被災地の子供に対する教育について書かれています。また、その上でこれからの課題について述べられています。

第二部では、これからの防災教育に触れており、震災前から津波防災に関する教育活動を行ってきた岩手県釜石市立釜石小学校の事例を紹介しています。

第三部では、原発問題を考える授業を行った小学校と高校の教員の実際の授業の内容が説明されています。

最後に第四部では、津波からの事前避難について書かれています。

< 感想 >

私はこの本を読むことで改めて東日本大震災について考えることができました。震災から 2 年半以上経ちましたが、絶対に風化させてはならないと感じました。そのためには、学校での防災教育が必要であると思いました。

（横山風太）